

湯川：「性・性意識の発達を個人差としてとらえる試み」

「性・性意識の発達を個人差としてとらえる試み」

－性別二元性からの脱却－

湯川 隆子*

Development of Sexuality from the Viewpoint of Individual Differences
Beyond the Sexual Dichotomy

Takako YUKAWA

要 旨

本稿は、性・性意識に関わる発達を「個人差」としてとらえることを提案するものである。すなわち、性・性意識の発達を性別二元性（男女）のカテゴリの中での個人差としてみるのではなく、性を人間の諸特徴のひとつととらえ、一人一人の主體的な自己の中に統合されていくという発想、発達観を主眼に、性・性意識の発達を理論化する試みである。具体的には、(1) 生物学的研究についての検討、(2) 社会化、認知発達の研究についての検討、(3) セックス、ジェンダー、セクシュアリティの3つの用語を、改めて定義したセクシュアリティの概念に統合することの可能性、(4) 再定義されたセクシュアリティに代表される性・性意識の発達を個人差としてとらえる発達観の可能性の4点から考察する。

【キーワード】 セクシュアリティ、発達、個人差

はじめに

性差研究、性役割（性別役割）研究からジェンダー研究へと質的吟味を重ねながら変容してきた性・性意識に関わる発達研究は、現在さらなる展開を見せようとしている。

これまで性・性意識に関わる発達研究は、女と男という「性別二元性 (sexual dichotomy)」を基礎におき、生物学的性（セックス: sex）、社会・文化・心理的性（ジェンダー: gender）、性的指向性（セクシュアリティ: sexuality）の3つの主要な概念（用語）を区別しつつ発展してきた。現在、これら3つの概念（用語）の関係と相互作用のメカニズムを解明することが中心的な研究課題のひとつとなっている。この過程の中で、最近では、sex, gender, sexualityいずれにおいても、これまで不問の前提とされてきた性別二元性に関する科学的事実の存否が問われ始めている。LGBTQ (lesbian, gay, bisexual, transsexual, questioning) と称され、同性愛に代表されるセクシュアリティに特異性をもつ人々、性同一性障害 (gender identity disorder; GID) などの特徴をもつ人々の存在が、性別二元性の絶対視に

平成26年9月30日受理 *社会学部心理学科 非常勤講師

対して根本的な疑問を突きつけているのである。これを契機として、多様性をもつものとして性をとらえ直そうとする社会的機運や研究動向が徐々にではあるが、しかし確実に生まれてきている(湯川, 2012)。

本小論は、こうした趨勢を踏まえつつ、それらを一步進めて、性・性意識に関わる発達を「個人差」としてとらえることを提案するものである。すなわち、性別二元性(男女)のカテゴリの中での個人差としてみるのではなく、性を人間の諸特徴のひとつととらえ、一人一人の主体的な自己(self)の中に統合していくことである。本稿では、このような発想、発達観を主眼に、性・性意識の発達を理論化する試みを行う。具体的には、(1) 生物学的研究についての知見と理論からの示唆、(2) 社会化、認知発達の研究についての知見と理論からの示唆、(3) sex, gender, sexualityの3つをsexualityによって統合することの可能性、(4) 性・性意識のあり方を個人差としてとらえる発達論の可能性の4点から、湯川(2012)の既稿の一部を引用しながら論を進めていきたい。

I. 性・性意識に関わる発達についての理論的経緯

個人差研究の一環として性差が取り上げられた20世紀初頭以来、ジェンダーの概念が登場する1960年代後半まで、性・性意識の発達では、生物学的要因に基づく生物学的性(sex)を重視し、生物学還元立場をとる本質主義的な発達観が支配的であった。しかし、ジェンダー(gender)概念およびジェンダーの視点に基づいたジェンダー研究が導入されてからは(井上, 2002a, b)、生物学的性を中心にしたそれまでの理論形成や研究枠組み、問題意識を基本的に問い直す動きが起きた。「ジェンダーはどのように形成されるのか」を主眼に性・性意識の発達研究が展開されるようになってからは(柏木・高橋, 1995; 湯川, 1995; Ruble & Martin, 1998)、社会・文化・歴史的な要因、特に、言語(言説)の役割を重視する社会構築主義的立場(上野, 2001; 加藤, 1998)を支持する見方が強くなった。以来、生物学決定論か言語決定論かというnature-nurture問題に重なる議論が、性・性意識に関わる発達研究においてもなされているが、最近では、本質主義と構築主義を対立的にとらえることから脱却すべきとの提案もなされている(小倉, 2001; 北田, 2006)。

性・性意識の発達理論の主要なものとして現在では、本質主義的立場に近いとみられる①生物学的要因に焦点をあてる立場(biological approach)と、構築主義の見方を取り入れた②社会・歴史・文化的要因を強調する社会化理論(socialization approach)、および③子どもの心理的要因に注目する認知発達理論(cognitive developmental approach)の3つがあるが、上述したように、ジェンダーが性・性意識の発達研究に組み入れられてからは、いずれの理論もsex, gender, sexualityの関係を視野に入れた理論構築が必要となった。その結果、現在ではどの要因や機制を重視し強調するかについての相違点をもつものの、生物学的要因の寄与を認め、それと社会・文化・心理的要因との相互作用によって性・性意識の発達が推し進められるとすることでほぼ一致をみている(Ruble et al, 2006)。したがって、発達は生物-社会-心理的(biological-social-psychological)な受精から死に至るまでの人間の生涯に起こる変化であるとする発達科学の考え方は性・性意識の発達にもそのまま当てはまる(高橋ら, 2012; 湯川, 2012)。

発達の目標を多様な個の可能性を最大限に伸ばすことにおくなら、個がさまざまな諸特徴を統合し

つつ発達していく上での一部として、性・性意識のあり方もそれらと一貫したかたちで統合すべきと考える。人間の性のあり方の現実や実相を直視し、客観的な眼と方法で追求した科学的な事実に基づいて、ジェンダー研究が強く指摘してきたジェンダー・バイアス（性に関わる差別）を払拭しうる性・性意識の発達理論と研究をつくっていくにはどうすべきかを、上記の①～③それぞれの理論がどのような問題の立て方や理論化を行っているかをみていく。

まず現在、発達科学を考察する上で欠かせないとされる①の生物学的研究では、性に関する新しい事実や発見が次々に提出されている。性についての生物学的事実が明らかになることで性・性意識の発達の理解がどう進み、どう変わるのかを検討する。同様に、社会・歴史・文化的要因や子どもの心理的要因に焦点を当てる②の社会化理論や③の認知発達論についても、何を期待できるのかを、これらの理論が今何を問題にしている、生物学的な研究をどう評価し、どう位置づけようとしているのかという点から考察する。

その際、性・性意識の発達研究で特に最近話題となっている「性同一性障害（現在では性別違和とよぶ）」と「同性愛」に注目する。性同一性とは、身体的性も含め自分の性について一貫した持続的な認識をもつことをさし、乳幼児期の性別知覚（性自認）から始まり、第二性徴が発現する時期にほぼ完成するとされるが、誕生時に認定された性別（多くは外見上の身体的性別）と自己が認知し望む心理的な性別とが一致せず違和感をもつ人々が存在すること、あるいはまた、性的指向が同性に向く（同性愛）人々が少なからず存在することが知られている。性同一性障害（性別違和）や同性愛には、社会・文化的要因と生物学的要因の両者が深く関わっているとみられるが、特に生物学的要因がどう働いているかをみるのによい事例である。

Ⅱ. 生物学的研究をどうとらえるか

遺伝子および胎生期ホルモンについての研究

生物学的要因から性・性意識の発達を問題にする研究の中で、至近的要因として遺伝子やホルモンの働きに焦点を当てる立場を取り上げる。

遺伝子と胎生期の性ホルモンの働きによって、生殖機能や構造の性差、脳の性差、身体的特性や行動上の性差の多くが説明できるとする立場で（Hines, 1982など）、生物学や発生学、内分泌学、脳神経科学、性科学などが多くの事実や知見を提供している。性別の発現は、遺伝子、性腺（性ホルモン分泌による）、内性器、外性器、脳という段階で進行し、各々の段階で何らかの事故が生じると、それは次の段階に順次影響するという複雑な連鎖によって進むため、性別の分化には差が生じるという。その結果、性別には多様な発生様態の生じる可能性が高いとされる（山内, 2000; Rogers, 2001）。

性・性意識の発達研究における遺伝子やホルモンの影響をみる研究は、遺伝子の変異や欠損によるクラインフェルター症候群やターナー症候群、ホルモン分泌の過不足が原因の副腎性器症候群や性ホルモン受容体遺伝子の変異による性ホルモン非感受性症候群などを主に対象としていたが、同性愛や性同一性障害（性別違和）も、発生途上での事故や混乱によるとする知見が近年提出されている。以下に、同性愛や性同一障害（性別違和）について、遺伝子やホルモンの働きをみる分子生物学や脳生理学的方法による研究、双生児法による発達研究、年齢変化をみる発達研究の3つを紹介する。

1. 遺伝子やホルモンによる脳の構造的差異をみる研究

性行動を司る脳の視床下部と大脳半球間を結ぶ脳梁や前交連に関する神経解剖学からの知見が多い。同性愛男性のゲイ遺伝子説 (X染色体上のq28の存在: Hamer et. al., 1993)、同性愛男性は異性愛男性に比べ、前視床下部の第3小核が小さい (LeVay, 1991)、視交叉上核は反対に大きい (Swaab & Hofman, 1995) とするゲイの視床下部説、大脳両半球を繋ぐ脳梁、前交連も同性愛男性が異性愛男性より大きい (Allen & Gorski, 1991) との知見もある。性同一性障害 (性別違和) では、男性から女性に性転換した人は、遺伝子的には男性だが、男性より前視床下部の第1小核の細胞数が少なく (Allen et.al., 1989)、分界条床核も小さい (Zhou et.al., 1995) などの知見がある。

これらの研究、特にルベイ (LeVay, S.) とハマー (Hamer, D. H.) の結果が公表されると、科学誌とマスメディアを巻き込んだ“ゲイ遺伝子論争” (LeVay & Hamer, 1994; Byne, 1994) が起き、ゲイ遺伝子排除論 (胎児中絶の遺伝的処置) さえも生まれた (Kitzinger, 2001; Rogers, 2001)。ルベイには、脳に損傷を与えるHIVウイルスの感染で死亡した同性愛男性患者の脳を用いているとの批判もあり (ヴィダール・ブノア=プロウエズ, 2005; Pinel, 2003)、ルベイ自身も、同性愛と遺伝子 (第3小核) とに相関関係はあるが、因果関係にはAIDS以外の別の要因が介在する可能性を示唆している (LeVay & Hamer, 1994)。これ以降、セクシュアリティの神経機構を同定する試みが刺激されたが、ルベイらと同種の研究を比較しても、前視床下部間質核4つの神経細胞群に性差自体があるとは認め難いとする知見 (Byne, 1994) もあり、結論は出ていないという (Pinel, 2003)。

2. 双生児法による遺伝要因と環境要因の研究

双生児における遺伝子の比較から、同性愛の生起について、男女とも一卵性での生起率が約50%と、二卵性や双子以外のきょうだい、養子きょうだい (いずれも約20%以下) よりも高いことから、同性愛には遺伝的要素があるとの報告がある (Bailey & Pillard, 1991; Bailey et al., 1993)。

最近では、異性の役割特性を嗜好する「非典型性役割特性」の発達における遺伝要因と共有環境要因の影響を調べた研究がある。3～4歳の双生児約6,000組の両親に、子どもの女性性、男性性の程度を評定させ得点化した結果から、女兒では高男性性をもつ者、男児では高女性性をもつ者について、上から順に5、10、15パーセンタイルを選び、各々の場合で非典型群と準典型群の2群に分け、その差を分析 (DeFries-Fulke, 極限分析) した結果、非典型性役割特性の発達に中程度の遺伝性と共有環境の効果が男児に見られた。完全な非典型性役割特性を嗜好する女兒に対する遺伝性は分散のほとんどを説明できるが、共有環境の効果は認められなかった (Knafo et.al., 2005)。

同じく3～4歳児約4,000組の双生児と双子ではないきょうだいの両親に、子どもの玩具や活動の性別嗜好、性別行動を評定させた研究では、男児に中程度の遺伝要因と有意な共有環境の効果がみられ、女兒にはかなりの程度の遺伝要因と中程度の共有環境要因の効果がみられたが、男女児共に共有環境効果が性別活動や行動に寄与しており、分散の約20%が説明されるという (Lervolino, et.al., 2005)。

これらの結果は、同性愛あるいは非典型性役割特性の発達における遺伝要因と共有環境双方の寄与を示していること、男児には共有環境が、女兒には遺伝要因の影響が相対的に高いという性差が予想されるが、その理由や詳細についてはまだ明確ではない。

3. 性・性意識の発達の年齢的变化をみる研究

まず、子ども時代 (childhood) の性別行動 (遊びや仲間選好) に胎生期ホルモンがどの程度影響しているかについて、2.5~12歳の先天性副腎皮質過形成症 (CAH; congenital adrenal hyperplasia) の女兒24名、男児19名と、統制群 (親戚の女兒16名、男児25名) を対象に、性別遊びと仲間の好みを観察からみた研究によれば、CAHの男児群と統制群男女児は同性の遊びや仲間を好むが、CAH女兒群は有意な異性活動選択と異性仲間選択の傾向を示し、ホルモンは女兒の性別活動には影響をもつことが示唆されている (Berenbaum & Snyder, 1995)。あるいはまた、子ども時代の遊びや仲間選択、セクシュアリティ、性的同一性、性格特性や攻撃性、および知的能力 (言語、数学、視知覚、空間把握、学習障害、ラテラルリティ) など、生物学的性差が予想されている特徴や特性に対して、ホルモンが影響するかについて、幼児から成人を対象とした膨大な研究の概観 (Collaer & Hines, 1995) を見ると、胎生期ホルモンは、子ども時代の遊びや活動には強く影響するが、セクシュアリティにはそれほど強く影響しないという。

続いて、子ども時代の性別行動と成人期のセクシュアリティとが関係するかについて、関連研究を、子ども時代 (childhood; 12歳以下) から成人期までを追跡した予測的 (prospective) 研究群と、成人の同性愛者に子ども時代の性別行動の記憶を再生させた回想的 (retrospective) 研究群の2タイプに分類し、それぞれの研究群にメタ分析を行ったものがある (Bailey & Zucker, 1995)。その結果、前者でも、男性の子ども時代の異性選択行動が成人期の同性愛を予測しうるが、後者のほうが、回想法への方法的問題は残るものの、成人の同性愛者は異性愛者よりも子ども時代の異性選択行動をより多く記憶しており、どの程度の割合の同性愛者が子ども時代に異性選択行動をとっていたかを知る上でより有効だとしている。この研究では、予測的研究法は女子よりも男子により有効であることが示唆されている。

さらに、3~12歳の性同一性障害 (性別違和) をもつ女兒25名 (平均約9歳、15名が性別違和、10名が境界と診断された) を15~36歳 (平均約23歳) まで追跡し、知的能力、性別行動、性同一性、セクシュアリティなどを調べた研究 (Drummond et al., 2008) でも、25名中3名が性別違和か性同一性形不全と診断され、セクシュアリティについては、両性愛か同性愛行動をとっている者が6名、それを夢想 (fantasy) している者が8名、そして残り8名は異性愛か性的に無関心な者であったという。女性においても、子ども時代の異性選択行動が性同一性形成の困難さや、両性愛もしくは同性愛につながる可能性が示唆されている。

以上の諸研究からは、子ども時代の性別遊びや行動、仲間の性別選好には胎生期ホルモンなどの生物学的要因の影響がある程度想定され、それが青年期以降の同性愛や性同一性障害 (性別違和) につながっていることも予想されるが、まだ詳細は明確になっていない。

遺伝子および胎生期ホルモン研究からの示唆

(1) 性・性意識の発達研究に生物学的研究を取り込む必要性

以上に紹介した1. から3. の諸研究から示唆される点を2つあげる。まず第1には、最近の生物学的研究の進展によって、生物学的要因 (主に遺伝子とホルモン) の働きに関する詳細で具体的な情報が得られるようになり、性・性意識の発達に寄与する生物学的要因の重要性がより認識されることと

なった。が、それと同時に、性・性意識の発達が生物的・遺伝的要因と社会・文化・心理的環境要因が複合的に関わっている極めて複雑な過程であることも改めて示された。たとえば、脳生理学や分子生物学では、同性愛や性同一性障害（性別違和）の原因と予想される脳の構造的特徴や遺伝子がある程度同定できるようになった。しかし、それが単独に直接同性愛や性同一性障害（性別違和）を発現するとは断定できていない。あるいは、双生児研究でも、遺伝要因と環境要因の具体的な内容の特定と、それらのどのような相互作用が性差を生み出すのかがまだ明らかではない。年齢変化を追う発達研究においても、子ども時代の性別遊びや活動に及ぼすとみられる遺伝子やホルモンの影響が、そのまま青年以降のセクシュアリティや性同一性につながるかの詳細はまだ明らかではないのである。

現在の生物学的研究の成果は、性・性意識の発達における生物学的要因の重要性を認識するには十分であるが、人間の生物学的性質・機能が環境要因と具体的にどのように関わっているかをより明確に知るためには、生物学研究のさらなる進展による詳細な情報が必要である。

(2) 生物学的研究からの絶対的な性的二型 (sexual dimorphism) への疑問視

第2の示唆は性別の発現メカニズムについてである。性別は発生環境に遺伝子やホルモンがどのように反応するかによって決まる極めて複雑な過程であるという事実が次第に明らかになってきたことである (山内, 2000)。ホルモンレベルの研究では、性別の発生には複雑な連鎖性があり、その過程で生殖および脳の構造や機能の性分化に差が生じ、生物学性別は典型男 (性) または女 (性) を両極とする連続体ととらえることが示されたことである。さらに、遺伝子レベルでも、性別は、複数の遺伝子が連鎖的に反応することによって決まる複合的なメカニズムであることも最近発見されつつある。Y染色体上のSRY遺伝子が男 (性) をつくる全てではなく、SRY遺伝子は最初のスイッチであり、いくつもの遺伝子に順次スイッチが入ったり別の遺伝子のスイッチを切ったりという複数の遺伝子の連鎖的働きによることや、男 (性) をつくるのに必要な遺伝子はX染色体上にも、また常染色体にも多くあることなどである (池田, 2006; ヴィダル・ブノア=プロウエズ, 2005)。この発見は、性染色体といわれる遺伝子のみの働きによって性別が直接規定されるわけではなく、遺伝子レベルでも性の発生様態が連続性をもつことを示唆している。

これらの発見は、生物学的性における絶対的な二型性の原理に疑問を呈するものである。生物学的性別は女か男に二分される悉無的なものではなく、無性や半陰陽などの間性 (intersex) を含めた連続体であるという主張 (橋本, 2004) が事実として裏付けられる可能性は高いといえる。そうなれば、生物学的性における絶対的な性的二型を根拠として設定されてきたジェンダーの二元性はその根拠を失う。性・性意識の発達はその基本的枠組みや概念を根底から見直すことになるだろう。

Ⅲ. 社会化理論、認知発達理論をどうとらえるか

1. 社会化理論

強化 (reinforcement) を基本原理とする社会的学習理論で、二次的強化学習、観察学習、モデリング、さらには、子どもの能動性 (内的強化) を重視する社会的認知論 (social cognitive theory) も含まれる (Bussy & Bandura, 1999)。この立場では、子どもが接するさまざまな社会的エイジェント (親、

仲間、教師などの身近な他者) や種々のメディアなどからの直接・間接的な圧力によって、子どもが性別特性や行動を学習し、それらを元に性同一性やジェンダー観 (gender ideology) を獲得すると考える (性的社会化: gender-typing)。

2. 認知発達理論

子どもの認知発達が性・性意識の発達を促すとし、物理的事象の分類概念の発達と並行して、人種や性などの社会的事象の分類概念も発達するとしたコールバーグ (Kohlberg, 1966) を始め、ジェンダー・スキーマ論 (gender schema theory) を提唱したベム (Bem, 1981; 1985) やマーティンら (Martin & Halverson, 1981; Martin et al., 2002) が含まれる。この立場では、子どもの性の自己認知である性自認ひいては性同一性形成を発達の中核におく。子どもの環境には性に関連する情報が溢れていて、子どもは、自己 (意識) の芽生えに伴い、それらの情報に基づいて自分の性についての素朴な知覚をもつようになる。コールバーグ (Kohlberg, 1966; 1969) は、これを元に、子どもは自己の性が生涯変わらないという「性の同一性・恒常性 (gender-identity & constancy)」を獲得するとした。ベムは、性に関する体制化された情報のネットワークを意味するジェンダー・スキーマ (gender schema) を提案し、これを形成、発達させていく認知作用を、情報を選択、記憶、体制化する情報処理過程とした (Bem, 1981; 1985)。マーティンらも、ジェンダー・スキーマを、自己と性に関連する情報を体制化していく心的連合 (ネットワーク) としている (Martin & Halverson, 1981; Martin et al., 2002)。性自認や性別の理解によってジェンダー・スキーマが形成されると、子どもはそれを元に、自己の性に適切とされる諸特徴や行動を同一視などによって取り込んでいくとする。子どもの認知作用に基づく自己社会化 (self-socializing) の過程とみる立場である (Martin et al., 2002)。

社会化理論、認知発達理論に何を期待するか

両理論は、強化によるか、認知的 (ジェンダー) スキーマによるかの違いはあっても、社会化 (gender-typing or self-socialization) を基本原理に、性・性意識の発達機制を理論化している (Ruble & Martin, 1998; Ruble et al., 2006)。この意味で、両理論は、社会・文化・心理的に構築されるジェンダーを主眼に性・性意識の発達を論じており、生物学的性については看過するか、性的二型を不問の前提にしてきたといえる。しかし、最近の生物学的研究が呈示している性についての新しい発見や事実をどうとらえるべきかが両理論に問われ始めている。

性・性意識の発達について、社会化の観点から理論的・実証的研究を長く牽引してきた先駆者のマッコビ (Maccoby, 1998) も、最近では、性別集団化 (gender segregation) 傾向を問題にする中で、この傾向が幼児期から成人まではほぼ一生続くことに注目し、社会化理論の立場に立ちつつも、これを説明するには2つの知見を加える必要があると述べている。1つは、同性同士の集団が形成されやすい理由、同性各々の集団内で生じる相互作用の特徴や性質、性別集団間の関係など、集団に関する知見である。2つめは、この傾向の持続性には何らかの生物学的性差が予想され、これに関する生物学的研究や進化理論の知見である。

マッコビの見解も参考に、ここではまず、社会化理論、認知発達理論がこれまで扱うべきであったにもかかわらず、直接には扱ってこなかった (1) 性差別意識の発達・学習の問題を先に検討し、次いで、

(2) 生物学的研究との関係をどうすべきかについて考察する。

(1) 性差別意識の発達・学習の解明：集団の要因を組み込む必要性

子どもは、就学前には性別に関わる特徴や行動を一通り学習できているが、それと同時に、性差別意識をも学習している可能性の高いことが示唆されている (Serbin et al, 1993; Martin & Ruble, 2009)。これには、自分の性を基準にした自己中心的思考、異性遊びをする他の子と自分との非類似性の知覚など、子ども個人の認知的作用が関わっていると推察されているが、性別集団化の影響、たとえば、子どもが自分の属する同性集団に同一視し、自分の集団を他集団より高く評価する「内集団びいき」などに注目する解釈もなされている (Maccoby, 1998; Martin & Ruble, 2009)。

性・性意識の習得に付随するとみられる性差別意識の学習について、サービンら (Serbin et al, 1993) は興味深い示唆をしている。幼・児童期には子どもはジェンダーについての学習をほぼできているが (ステレオタイプ化)、革新的な父親の子どもは、同時に、ジェンダーに対する柔軟性 (反ステレオタイプ化) をも学習しているというものである (Bradley & Zucker, 1997も参照)。

これらのことは、性・性意識の学習および性差別の学習いずれにも、社会化のエージェントとしての親の影響 (親がどのような性・性意識をもっているか、子どもとどのような相互作用を行うかなど) と共に、仲間の影響についてももっと注目すべきことを示唆している。たとえば、子どもが属する仲間集団がどのような特徴をもっているか、その中で子ども同士がどのような相互作用をしているのか、他の集団との関係はどのようなかなど、社会化と性別集団化両方への仲間の影響を同時に問題にする視点や研究方法が要る。それには、集団と個人、集団間に関する集団研究や社会心理学の知見と方法を積極的に取り入れることが必要だろう。

(2) 社会化理論、認知発達理論に生物学的要因をより組み込む必要性

マコビイの見解にもあるように、性・性意識の発達理論において今まで以上に生物学的要因を考慮すべきことは明らかだが、具体的にどう考えたらよいか。本稿でみてきた性同一性の形成を例にとってみる。性同一性とは、先に言及したように、自己の身体的性と心理的性の統合的認知であり、生物学的要因、社会・文化的要因および個人の心理的・認知的要因が深く関わっているのは確かである。しかし、心理的性に重きをおいて性同一性の形成を論じてきた両理論 (Ruble et al., 2006; Martin & Ruble, 2009) の発達機制に、少なくとも絶対的な二型を前提としない身体的性をどう位置づけるのか、そして、ジェンダーの二元性を基にしてきた心理的性をどう再定義して位置づけていくのかという問いに応えなくてはならない。この問いに積極的に応えることを社会化理論、認知発達理論に強く期待したい。

IV. 性に関わる概念をセクシュアリティで統合することの可能性

現在、性・性意識の発達研究における主要な課題のひとつが、ジェンダー、セックスおよびセクシュアリティの3つの概念をどうとらえ、関係づけるかである。ジェンダーとセックス両概念とその関係については、近年のジェンダー研究でも多くの議論が重ねられてきたことを先述した。だが、セクシュアリティ

については、フェミニズム理論や社会学ではより早くから注目され、セクシュアリティが多様な様態を示すことについての文化・歴史的事実を踏まえた考察が積極的に進められてきた。にもかかわらず、セクシュアリティの問題は、性科学や性の病理学に委ねられ (Money & Tucker, 1976; Colapinto, 2000 など)、心理学とくに発達心理学では、(性別二元性に基づいた) ジェンダーに関する特性や意識などの性差やその発達に関心や焦点が偏りがちであった。

しかし、性同一性障害 (性別違和) や同性愛など、発達心理学ではこれまで病理とされてきた行動や心理について、フェミニズム理論をはじめとする多くの性に関する関連研究領域からのさまざまな解釈や論争が提示されるにおよんで、性に関わる発達研究もセクシュアリティについて本腰を入れて取り組み始めた。

あるいはまた、ゲイやクワイ問題が指摘してきたことだが、異性愛以外のセクシュアリティが近代社会において、性規範によって宗教や倫理・道徳、社会生活や家族、職業のあり方に至るまで厳格に統制されてきたという歴史的事実が示すように、セクシュアリティのあり方は社会・文化・心理的な要因に強く規定されているといえる (竹村, 2000a)。同性愛と並んで、近親相姦の禁忌 (incest taboo) が、キリスト教下での近代 (西欧) 社会における人間観や社会・家族制度を規定し、維持するための法律であったのは周知の事実であろう (内藤, 2002)。

セクシュアリティが本格的に議論の俎上に加わったことで、性・性意識のあり方に関わる発達研究も新たな局面をうむこととなった。セクシュアリティが生殖や性行為に関わるものであることは確かであり、生物学的要因の統制下にあることは否定できない。しかし、セクシュアリティに早くから注目し、精神分析の立場から理論形成を行ったフロイト (Freud, 1986) が、性的欲求を人格発達と結びつけ、セクシュアリティを人格発達の主要な一部としたことはよく知られている。すなわち、性に関する諸欲求が、無意識裡に、性的二元性を前提とした社会化 (ジェンダー化) によって、自我の一部に組み込まれていくとし、同性愛や近親相姦などを禁忌する意識や価値観 (超自我) をもつことがセクシュアリティの理想の姿としたのである。

フロイトがあくまでも性別二元性を念頭においていた点では、性・性意識のあり方を個人差としてとらえるという立場からは限界を有するといわざるを得ない。しかし、フロイトがセクシュアリティの発達において、性自認さらには性的同一性を生物学的性に社会・文化的な意味づけを与えることにより獲得されるとし、生物学的性に備わっている生得的傾性が社会・文化・歴史的な環境要因との相互作用によって解発されると考えていたことは、(フロイトは解剖学的性を宿命とする生物学決定論者とみなされてきたが)、発達における生物学的要因と社会・文化的要因の相互作用を念頭において論を構成していた点で注目すべきであり、発達科学が展開している議論、さらには、ここで考察している性・性意識の発達研究の議論に資するものであろう。

生物学的要因と社会・文化・歴史的、さらには心理的要因との複雑な相互作用の下で発達していくものとしてセクシュアリティをとらえるならば、生殖・性行為の指向性を意味するものとして狭義に用いられてきたセクシュアリティの概念を今一度、その成り立ち、社会・歴史的背景を跡づけつつ精査した上で、再定義することが必要と考える。

では、セクシュアリティの定義をどのようにすればよいか。これまでの諸定義や論考を参照しながら考えてみたい。

セクシュアリティとは端的にいえば、“性に関わる欲望と観念の集合”だとされる。より具体的には、人間の性行動に関わる心理と欲望、観念と意識、性的指向と対象選択、慣習と規範などの集合を意味するが、現在では性に関わる現象の総体を示す用語として「性現象」(加藤, 1998)と呼ばれるに至っている。そもそもセクシュアリティの概念は、1960から1970年代にかけてアメリカを中心に、生物学的性であるセックスと区別する意味で使われ始めたとされる。“セックスは両足のあいだ(すなわち性器)に、セクシュアリティは両耳(すなわち脳)にある”としたアメリカ性情報・教育協議会(SIECUS)の創始者カルデロンとカーケンダールによれば、セクシュアリティは、自然と本能ではなく、文化と歴史に属するとされる(上野, 2002; 山田, 2002)。さらには、フーコー(Foucault, M.; 性の歴史全3巻、1976-1984, 邦訳1986-1987)以降、それまで自然科学や性科学などで動物的な次元で扱われていたセクシュアリティが人文社会科学として考察されるようになった。

あるいはまた、精神分析の系譜でも、フロイト理論を再解釈、再評価しながらフェミニズム論にも取り込まれ、さまざまな展開を見せている(加納, 1997; 竹村, 2000b)。たとえば、前エディプス期の母子関係に焦点を当てたクライン(Klein, M.)の対象関係論を発展させ、無意識裡に形成される母子関係に基づいて母親が育児を独占することが、男女児に異なる自己を作り、それが性差別を生むとしたチョドロウ(Chodorow, 1978)、また、精神分析を言語(言説)の問題に置き換え、身体概念を生物学的決定論から引き離れたラカン(Lacan, J)、社会構築主義的立場から、セックスはジェンダーによってのみ定義されるとして性の二項概念を否定し、ジェンダーの二分性をも超えたn個の性を唱えたバトラー(Butler, J.)などがある(加納, 1997; 竹村, 2000b)。

以上に見てきたことからわかるように、セクシュアリティの概念は、生物学的性に対して文化・社会・歴史的につくられる性を主眼として、セックスと区別する意味で提出されてきたという経緯をもつ。一方、時代をほぼ同じくして、文化・社会・心理的性を意味するジェンダーの概念もフェミニズムの視点から提唱されている。このような経緯と、現在セックス、ジェンダー、セクシュアリティという3つの用語が区別されているという状況を踏まえたとき、性・性意識の発達を個人差の観点からとらえる立場からすれば、生物学的にのみ決定されず、文化・社会・心理的諸要因との相互作用から形成、発達していくものとして、セクシュアリティをとらえることが最も妥当と思われる。

これまでの性役割研究やジェンダー研究が問題にしてきたセックスかジェンダーか、さらに各々の概念の中での女か男という性別二元性に立った二項対立的な視点や研究枠組ではもはや複雑な様相を示す性の問題を扱えなくなり、多様な様態をもつものとしてみることの基本認識は必然的に高まってきている。

性・性意識の発達の現実や諸相を正確に把握し、その成り立ちやしくみを解明するには、経緯は異なるものの、現在、意味内容がかなり重複し、錯綜しているセックス、ジェンダー、セクシュアリティの用語を、セックス、ジェンダーどちらの要因にも関係し、かつ両方を含意しうる概念としてセクシュアリティに包含、吸収することが可能だと考える。セックスとジェンダー両概念を実質的に統合することが可能で、かつ多様な性の現実の様態や実像を扱いうるセクシュアリティの概念が、性・性意識のあり方の発達を説明する上でより説得力をもつと考える。セクシュアリティの概念を性・性意識の発達研究の主要概念として据えることを提案したい。

具体的には、セクシュアリティの概念を、性に関わる現象の総体を示す用語として位置づける。心理

学的な見地からは、セクシュアリティは、思考、観念、意識、感情、欲望および性的指向と対象選択などの性にかかわる集合体であるとみる。発達の進展に伴って形成され、変容していく性に関わる人格の総体であり、個人の自己に統合されるべきものと定義したい。

なお、(性的指向性という)狭義の概念の下ではあるが、セクシュアリティが生得的なものではなく、発達段階にともなう習得されていくとし、発達途上で変容することを念頭に置いたベム (Bem, 1996) の「性的指向発達モデル」は、その意味で示唆に富む。

V. 性・性意識に関わる発達を個人差として位置づけることの妥当性

性・性意識のあり方は、自己のあり方、すなわち、個人の思考や行動、人間関係の持ち方などに影響をあたえる重要な要因のひとつである。「発達は生涯にわたる変化であり、発達には多様な側面、多様な軌跡がある」「発達は個々の人間がもつ個性としての諸特徴を最大限に伸ばすことである」とする発達科学の立場に沿えば、性・性意識のあり方を個人差としてとらえることの妥当性が見えてくる。論を進めるに当たって、先の章で紹介してきた諸知見をまとめてみる。

乳幼児期を中心にみた性・性意識の発達についての諸実証研究は、LGBTQやGID (性別違和) が発達初期 (遅くとも就学前) から既に現れる事実を呈示していた。発生障害も含め、これらの特徴をもつ子どもは、異性の仲間や性別活動・遊びへの自発的選好を顕著に示すという。これらの傾向が思春期にまで一貫して持続するとの知見もある。他方、これらの傾向を生物学的性に合ったものに修正するための性別しつけは、生育環境などの状況や条件により可能とする報告も紹介した。

そして、これらの諸事実を解釈するには、性別二元性そのものを再考する視点が是非とも必要であることも先述した。現に、性を扱う主要理論、つまり、生殖を基礎におく生物学的性差がどう出現するかを扱う生命科学や分子生物学などの分野でも、また、性同一性の認識の形成を社会・文化・心理的性の基礎とする発達や教育の分野いずれの立場もが、そうした動きを確実に見せ始めていることも指摘した (日本教育心理学会第55回シンポジウム, 2013; 高橋ら, 2012)。

現実の姿や現場の問題を正確にとらえていくには、性別二元性を前提とせず、性を多様な様態、言いかえると、個人差とみる視点が不可欠である。性を個人差として扱うことは、“女にもいろいろあらーなあ、男にもいろいろあらーなあ”といった性別カテゴリの中での個人差をさすものではない。発達の個々の主体が、性別二元性に囚われることなく、自分の性・性意識のあり方を自身で決定し、自己の中に位置づけていくことなのである。

(1) 個人差としての性・性意識に関わる発達の基本仮説

セクシュアリティに代表される個人差としての性・性意識発達の基本仮説を、①自身で性・性のあり方を認知・評価し (性の自己認知・評価)、②それに基づいて表現し行動する (性の表出行動)、そして、③それを他者が認めること (他者からの承認・受容) の3要件 (側面or次元) から構成される。これら3つが一貫性をもって発達に沿って変容しながら自己に統合されていくと考える。具体的には、以下のような内容となる。

①性の自己認知・評価: 主体としての自己 (self) に他の諸特徴と関連し統合しうる形で自身の性の

あり方を認知し、決定することである。セクシュアリティの自己決定であり、肯定的にとらえていることが必須である。どのような性の自己認知をもつかについての制限はない。いわゆる典型とされてきた女(男)という様態であってもよいし、“第三の性”とも称される間性(intersex)でもいずれも選択可能である。この自己認知が性別二元性に囚われないことが前提である。生物学的要因、社会・文化・歴史的な要因が、個々人の特質や特徴の発達や発達全体に様々な時期や諸相においてダイナミックに作用するとするならば、それと全く同じ意味で、性のあり方に作用すると考えることは論理的にも整合性をもつものである。さらに、この自己認知・評価は発達の進展に伴って、変容するとみることも重要な視点である。

②性の表出行動:自身で決定し、選択した性のあり方に基づいて、自己の性の表現を実際の言動などで表すことであり、セクシュアリティの具体的な表出行動である。この表出行動は、①に連動しておのずから変容するものであり、①、②が一貫していることが必須である。

③他者からの承認・受容:①、②における個人の性・性意識のあり方を他者が認め、受容することである。個を認めることとは、自他ともにお互いの個を認めることであり、生涯発達の根幹発想である。この基本本仮説は①、②、③の3つの要件が相互関連し、矛盾なく一貫することが個々人の性・性意識の発達を保証し、促していくと考える。

性・性意識のあり方に変容を認めることとは、性における永続性、普遍性を想定しないことを意味する。発達自体を一生涯にわたる変容の過程とみる発達科学の立場に立てば、自己が誕生時(発生時)から成人へと発達的変容を遂げるならば、その自己の一部として統合されながら発達していく性に関わる諸特徴も、それに応じて変容するとみるのが自然である。

(2) 「性同一性」という概念の再考

性・性意識の発達を個人差としてとらえるという発達観を立てる上で考察が必要な概念がある。それは性に関わる中核的な概念とされてきた「性同一性」である。これまで性同一性は、性自認および性対象に関する自己内での首尾一貫した認識を指し、異性愛が基本とされてきた。セックスとジェンダーの概念が登場して以降は、性別二元性の下で、生物学的性であるセックスとジェンダーである心理的性の両者を一致させ結びつける自己認識であるとする基幹概念となった。人間が自身を理解し認識するとき、性的次元(すなわち、女か男という性別二元性)に沿って自分を位置づけ、明確化するときの総体でもであるとされた。この性同一性の概念には、人間の認識や行動全てにわたって性が具体的な形で伴うものであること、および、人間存在すなわち性的存在という人間観、いいかえると、人間の本質を性的存在とみなす人間観が通底している。この性同一性には普遍的で永続性をもった不変的な性別二元性が前提化されてきたのはいうまでもない。

では性・性意識の発達を、上記(1)の基本仮説に立って考えた場合、この性同一性の概念はどのように考えるべきか。性同一性の概念から性別二元性の原理を取り払うことで十分か。人間がいつの場合も性的存在であるとする見方に問題はないのか。

性・性意識のあり方を各人の自己の一部に位置づける立場からは、この概念の吟味は、むしろ性同一性とその重要な一環をなすとされてきた「自己同一性」の概念そのものの文脈の中でなされるべきと考える。

エリクソン(Erikson, 1950; 1959)によって確立された「自己同一性(ego identity)」の概念とは「私

はいつも同じ私である (selfsameness, sense of sameness)」という認識と「私は他者と重要な特徴を持続的に共有している (persistent sharing)」という認識の両方が融合 (a mutual relation) したものであるとされる。わかりやすくいえば、「私は私である」という本人の認識と「私は他者・社会によって承認されている」という認識の両方で成り立つ概念である (伊藤, 2012)。この自己同一性の概念は、これまで "identity" という単語に象徴されるように、「普遍的で永続性をもった不変の自己の統合的認識」を意味する認識構造として発達の中核のひとつに位置づけられてきた。

しかし、この概念は多くの論考や実証的知見が重ねられる中で、現在も少しずつ修正されつつある (伊藤, 2012)。その中で最も重要な変更は概念そのものの特質についてである。すなわち、青年期になって完成し、確立すると強調されてきた「自己同一性」は、実際には生物-心理 (自己) -社会的要因によって、乳幼児期から児童期、青年期と絶え間なく発達し続ける中で、節目節目において修正と再構成を繰り返しながら生涯にわたって変容を遂げていくものであるととらえられるようになってきたことである。

成人期以降も自己同一性が再構成される必要があるという発達観は、いま多くの実証データで支持されているし、生涯にわたる発達像を見通したときの発達の、臨床的な知見からも強く提言されている (岡本, 1997; 杉村, 2001)。自己同一性の概念についてのこのような新たな視点は、自己同一性を永続的で普遍的な概念としてではなく、発達の進展に伴って柔軟に変容しつつ達成されていく概念へと再構成させつつある。

自己同一性をこのように考えてくると、性のみ固有で、しかも性別二元性に依拠した普遍的で永続性をもつ不変の概念とされてきた性同一性もその意味や意義を必然的に変更せざるを得なくなる。「性は一生不変である」とする性同一性というこれまでの概念をどう考えたらよいか。自己同一性は変容するという立場からの議論の中では、その一環である性同一性もそれに応じておのずから変容すると考えることが、理論的にもまた現実の経験にもよく整合するといえよう。人間は生物学的性に依拠した性的存在としてだけ一生を生きるわけではない。個人間でも個人内でも、人生の時期や相に応じて、生殖を含めた性のあり方とその意味や重みは一様ではなく、相対的であると考えるのが現実の姿であろう。

(1) で述べた個人差としてのセクシュアリティに代表される性・性意識のあり方の基本仮説を自己同一性の文脈に置くとその内容と意味がよく見えてくる。「自己認知・評価」「自己の表現・行動」「それへの他者からの承認・受容」という本仮説の3要件は、自己同一性を構成する基本要素に一致し、符合しているとみることができるのである。

セックス (身体的性)、ジェンダー (社会・文化・心理的性) という概念を、セクシュアリティに組み込む形で吸収するという発想の下では、これまでのような性同一性の概念はその実質的な意味を失うことになる。生物学的要因と多様な他者や社会・文化的環境要因との相互作用の中で、個人が主体的に統合し発展させていくものとしてセクシュアリティとらえることとは、身体に還元するのではなく、身体を言語にのみ規定される虚構としてでもない新たなセクシュアリティや性的同一性を構想すべきという小倉 (2001) の提案とも一脈通じるものがある。新たなセクシュアリティの概念の下で、性・性意識に関わる発達論が具体的に展開されるのを期待したい。

おわりに

本稿では、性・性意識に関わる発達を、発達科学の立場に立って個人差としてとらえることの妥当性を考察した。これまで使われていたセックス、ジェンダー、セクシュアリティの3つの用語を、定義し直したセクシュアリティの概念に吸収し統合することを提案した上で、新たなセクシュアリティの発達を、自己同一性の概念と連動させて仮説化した。このような仮説を提示することで、セックスおよびジェンダーの概念は表舞台から退くことになる。しかしこのことが、これまで性・性意識の発達やそれに随伴してきた男女差別などを考察するのに有効であったジェンダーの概念そのものが不要だということを意味するものではない。新たなセクシュアリティの概念の下での発達を構想する上で、ジェンダーの概念や視点が立ってきた性別二元的枠組みそのものを脱却するための理論的帰結だといえる。ジェンダーの概念は発展的に解消されることにはなるが、それが果たしてきた研究の役割や精神は本仮説の中にしっかりと命脈を保ち続けている。

引用文献

- Allen, L.S., Hines, M., Shryne, J.E. & Gorski, R.A. (1989). Two sexuality dimorphic cell groups in the human brain. *Journal of Neuroscience*, 9, 497-506.
- Allen, L.S. & Gorski, R.A. (1991). Sexual dimorphism of the anterior commissure and massa intermedia of the human brain. *Journal of Comparative Neurology*, 312, 97-1040.
- Bailey, J.M., & Pillard, R.C. (1991). A genetic study of male sexual orientation. *Archives of General Psychiatry*, 48, 1089-1096.
- Bailey, J.M., Pillard, R.C., Neale, M.C. & Agyei, Y. (1993). Heritable factors influence sexual orientation in women. *Archives of General Psychiatry*, 50, 217-223.
- Bailey, J.M., & Zucker, K.J. (1995). Childhood sex-typed behavior and sexual orientation: A conceptual analysis and quantitative review. *Developmental Psychology*, 34, 43-55
- Bem, D.J. (1996). Exotic become erotic: A developmental theory of sexual orientation. *Psychological Review*, 103, 320-335.
- Bem, S.L. (1981). Gender schema theory: A cognitive account of sex-typing. *Psychological Review*, 88, 354-364.
- Bem, S.L. (1985). Androgyny and gender schema theory: A conceptual and empirical integration. In T.B. Sonderegger, (Ed.) *Nebraska symposium on motivation*, vol. 32, University of Nebraska Press, 179-226.
- Berenbaum, S.A., & Snyder, E. (1995). Early hormonal influences on childhood sex-typed activity and playmate preferences: Implication for the development of sexual orientation. *Developmental Psychology*, 31, 31-42.
- Bradley, S.J. & Zucker, K.J. (1997). Gender identity disorder: A review of the past 10 years. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 37, 872-880.
- Bussey, K. & Bandura, A. (1999). Social cognitive theory of gender development and differentiation. *Psychological Review*, 106, 576-713.
- Byne, W. (1994). The biological evidence challenged. *Scientific American*, 270, 50-55.
- Chodorow, N. (1978). *The reproduction of mothering: Psychoanalysis and Sociology of Gender*.

- Berkeley:University of California Press. (大塚光子・大内管子 (訳), (1981) 母親業の再生産, 新曜社)
- Colapinto, J. (2000). *As nature made him; the boy who was raised as a girl*. New York: Harper Collins. (村井智之 (訳) (2000). プレンダと呼ばれた少年, 無名舎).
- Collarer, M.L. & Hines, M. (1995). Human behavioral sex differences: A role for gonadal hormones during early development? *Psychological Bulletin*, vol. 18, 55-107.
- Drummond, K.D, Bradly, S.J, Peterson-Badali, M, & Zucker, K.J. (2008). A follow-up study of girls with gender identity disorder, *Developmental Psychology*, 44, 34-45.
- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*, Norton. (仁科弥生 (訳) (1977-80)). 幼児期と社会1-2 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and life cycle*. International University Press.
- Foucault, M.: 性の歴史 全3巻, 1976-1984, (邦訳1986-1987)
- Freud, S. (1986). *Human sexuality: Three essays on the theory of sexuality*. In A.Freud (selected), *The essentials of psychoanalyses*, 269-432. Horgan Press. (懸田克躬・高橋義孝ら (訳) (1984). 性欲論 症例研究. フロイト著作集5 人文書院).
- Hamer, D.H., Hu, S., Magnuson, V.L., Hu, N. & Pattatucci, A.M.L. (1993). A linkage between DNA markers on the X chromosome and male sexual orientation, *Science* 261, 16, 321-327.
- 橋本秀雄 (2004). 男でもない女でもない性・完全版-インター・セックス (半陰陽) を生きる. 青弓社.
- Hines, M. (1982). Prenatal gonadal hormones and sex differences in human behavior, *Psychological Bulletin*, 92, 56-80.
- 池田清彦 (2006). ヒトの性はいかに決定されるか. 大航海, No.67 (特集: 女と男への新視点). 講談社, pp.74-81.
- 井上輝子 (2002a). ジェンダー研究. 岩波女性学事典, 岩波書店, pp.166-167.
- 井上輝子 (2002b). 女性学 岩波女性学事典, 岩波書店, pp.271-214.
- 伊藤美奈子 (2012). アイデンティティ. 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子 (編著) 発達科学入門 [3] 青年期～後期高齢期, 東大出版, pp35-50.
- 加納彩子 (1997). 精神分析とフェミニズム. 江原由美子・金井淑子 (編) フェミニズム, 新曜社, pp.146-171.
- 柏木恵子・高橋恵子 (編) (1995). 発達心理学とフェミニズム. ミネルバ書房.
- 加藤秀一 (1998). 性現象論-差異とセクシュアリティの社会学. 勁草書房
- 北田暁大 (2006). ジェンダーと構築主義-何の構築主義か. 江原由美子・山崎敬一 (編). ジェンダーと社会理論. 有斐閣, pp25-36.
- Kitzinger, C. (2001). *Sexuality*. In Unger, R.K. (Ed.) *Handbook of the psychology of woman and gender*. John Wiley & Sons. pp.272-285. (アンガー, R.K. 森永康子・青野篤子・福富護 (監訳) 日本心理学会ジェンダー研究会 (訳) (2004). 女性とジェンダーの心理学ハンドブック. 北大路書房. pp.324-340).
- Knafo, A., Lervolino, A, C, & Plomin, R. (2005). Masculine girls and feminine boys: Genetic and environmental contributions to atypical gender development in early childhood, *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 400-412.
- Kohlberg, L. (1966). A cognitive-developmental analysis of children's sex-role concepts and attitudes. In E.E.Maccoby (Ed.), *The development of sex differences*. Stanford University Press. (pp.82-173).
- Kohlberg, L. (1969) Stage and sequence: The cognitive developmental approach to socialization.(In D. A. Goslin (Ed.) *Handbook of socialization theory and research*. Rand MacNally, pp.347-480.
- Lervolino, A, C, , Hines, M, Golombok, S, E, & Plomin, R. (2005). Genetic and environmental influences on sex-typed behavior during the preschool years, *Child Development*, 76, 826-840.
- Levy, S. (1991). A difference in hypothalamic structure between heterosexual and homosexual men,

- Science, vol.253.No.5023, 1034-1037.
- Levay, S.& Hamer, D.H. (1994). Evidence for biological influence in male. homosexuality Scientific American, 270, 44-49.
- Maccoby, E.E. (1998). The two sexes: Growing apart and coming together. Harvard University Press.
- Martin, C.L. & Halverson, C.F. (1981). A schematic processing model of sex-typing and stereotyping in children, Child Development, 52, 1119-1134.
- Martin, C.L., Ruble, D.N.& Szkrybalo, J. (2002).Cognitive theories of early gender development, Psychological Bullrtin, 128, 903-933.
- Martin, C.L.&Ruble, D.N. (2009). Patterns of gender development. In S.T.Fiske, D.L.Schacter & R.J. Sternberg (Eds.), Annual Review of Psychology, vol.61, 353-381.
- Money, J. & Tucker, P. (1975). Sexual signatures: On being a man or a woman. Little, Brown and Company.
(マネー, J.&タッカー, P. 朝山新一・朝山春江・朝山耿吉 (訳) (1979) 性の署名: 問い直される男と女の意味. 人文書院)
- 内藤和美 (2002) 近親姦. 岩波女性学事典, 岩波書店, pp.177.
- 小倉千加子 (2001) . セクシュアリティの心理学. 有斐閣.
- 岡本祐子 (1997) . 中年期からのアイデンティティの心理学. ナカニシヤ出版.
- Pinel, J.J. (2003). Biopsychology, Pearson Education. (佐藤敬・若林孝一・泉井亮・飛鳥井望) (訳) (2005) . バイオサイコロジーー脳ー心と行動の神経科学ー. 西村書店) .
- Rogers, L. (2001). Sexing the brain. Columbia University Press.
- Ruble, D.N. & Martin, C.L. (1998). Gender development. In N.Eizenberg, (Ed.) Handbook of child psychology 5thedition, vol.3. Social, Emotional, and Personality Development. Wiley. pp.933-1016.
- Ruble, D.N., Martin, C.L.& Berenbaum, S.A.(2006). Gender development. In N.Eizenberg (Ed.) Handbook of child psychology 6thedition, vol. 3. Social, Emotion, and Personality Development. Wiley. pp.858-932.
- Serbin, L.S., Powlishta, K.K.& Gulko, J. (1993). The development of sex typing in middle childhood, Monographs of the Society for Research in Child Development, 232, vol. 58.
- 杉村和美 (2001) . 関係性の観点からみた女子青年のアイデンティティの探究ー2年間の変化とその要因 発達心理学研究, 12, 87-98.
- Swaab, D.F, & Hofman, M.A. (1995). Sexual differentiation of the human hypothalamus in relation to gender and sexual orientation, Trends in Neuroscience, 18, 264-270.
- 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子 (2012) . 発達科学入門 [1] 理論と方法, 東大出版
- 竹村和子 (2002a) . クリア理論. 岩波女性学事典, 岩波書店, pp.100
- 竹村和子 (2002b) . 精神分析. 岩波女性学事典, 岩波書店, pp.275-278
- 上野千鶴子 (編) (2001) . 構築主義とは何か. 勁草書房.
- 上野千鶴子 (2002) . セクシュアリティ. 岩波女性学事典, 岩波書店, pp.293-295.
- Vidal, C. & Benoit-Browaays, D. (2005). Cerveau, Sexe et Pouvoir. Belin-Paris. (ヴィダル, C.・ブノア=プロウエズ, D. (金子ゆきこ (訳) (2007) 脳と性と能力, 集英社新書.)
- 山田昌弘 (2002) . セクシュアル・アイデンティティ. 岩波女性学事典, 岩波書店, pp.295-296.
- 山内俊雄 (2000) . 性の境界-からだの性とところの性 岩波書店.
- 湯川隆子 (1995) . 性差の研究. 柏木恵子・高橋恵子 (編著) 発達心理学とフェミニズム ミネルバ書房, pp.116-140.
- 湯川隆子 (2012) . ジェンダーと発達. 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子 (編著) 発達科学入門[1] 理論と方法, 東大出版, pp167-187.

Zhou, J.N., Hofman, M.A., Gooren, L.J.G.& Swaab, D.F. (1995). A sex difference in the human brain and its relation to transsexuality. *Nature*, 378, 68-70.

Summary

This brief article rethinks the development of sexuality from the viewpoint of life-span development. First, three concepts, i.e., sex, gender and sexuality are integrated into the re-defined concept of sexuality. Second, a hypothesis about the development of sexuality re-defined is proposed in terms of individual differences.

Key words: Sexuality, Development, Individual Differences